

あるよ武としかもとにて哥よミけるついてに、あすなむ

葦高の宮にまうてゝんやなといひてわかれける、其暁

より風あらましく吹出ツ、いと寒けれハ、かうてハなと

おもひのとめて過しける程に、二ひはかり経て風やミ

空のけしきもあたゝかけにミゆれハ
夏鼎

散のこる紅葉わけミむあしたかの神無月こそうしろやすけれ

とおもふハいかにそやなといひやりけれハ

返し
武敏

いさ行て我もかさゝむあしたかの神無月までのこる紅葉を

同しく
元礼

うしろやすく君しおもはゝ我も又いさや分ミむのこる紅葉を

【現代語訳】ある夜、俵屋の岡武敏のもとで歌を詠んだ際に、「明日足高神社に詣でてみようか」などと言って別れた。その暁より風

が荒々しく吹き出しきてとても寒いので、このようでは（足高神社詣では無理かな）などと思いを落ち着かせて過ごしている

うちに、二日ほど経て風が止み、空のようすも暖かい感じにみえたので、井上夏鼎は

強風に耐えて散り残った紅葉を分け入って見てみたい。（そうできれば今年の）神無月も心残りが無いことだ。（夏鼎）

と思うのだがどうだろうかと岡武敏・黒瀬元礼に言い送ってみたところ、（返歌がきた）

ぜひ行って私も足高山に神無月まで残っている紅葉の葉を（頭髮・冠などに）挿ざりたいものだ。（武敏）

心残りしないようにと君が思うのなら私もまた是非とも残っている紅葉を分け入って見てみたい。（元礼）

演習問題④解答

とかうにいひもてゆく程に、やかてかの山の麓にきつ来ぬ、
社司井上何かしかりとひけるに、けふハ環のぬし外に行ぬとて
父なる人いてゝ先といへハ、しハし息やすめて社頭にのほれは
社司のもとより御室ひらかせ、茶くた物さかなやうのものまで
とりくもてきつゝねもころにあるしす、先社頭を（虫喰）

【現代語訳】

このように言い合つて行くうちに、やがて彼の山（足高山）の麓に行き着いた。社司井上何某のもとを訪問すると、今日は環氏は外に出かけていると言つて環の父に当たる人（井上垂明）が出てきて先と言うので、しばし息を休めて社頭に登つたところ、社司の方から建物を開けてくれ、お茶・果物・肴といったものまで色とりどり持ってきて懇ろにもてなしてくれた。

夏鼎

ふりはへてまたこそとはめ軒ちかくミゆるこしまの初雪の比

返し

環

むくらふのけかしき宿もいとすハかならす雪の頃なたかへそ
かへりくる道すからうすひきうたふ声のたえす聞ゆれは

ひろさた

ミつき物いそくなるへしよるも猶いとなくミゆる民の家々

【現代語訳】

遠出してまた是非訪れたいと思う、軒端近くに眺望できる児島の山並みに初雪が降る頃に。(夏鼎)

返歌

律が生えたような汚い家でもかまわないなら、雪のころ再訪との約束を必ず違えないでほしいね。(環)

(倉敷村へ) 帰りゆく道すがら、白をひきながら歌う声が絶えず聞こえてきたので、(その様子を歌にしてみた)

貢ぎ物の用意を急いでいるのだろう、民の家々は夜もなお忙しそうにみえるなあ。(夏鼎)